

鴨長明著、市古貞次校注「方丈記」岩波文庫、岩波書店 1989年5月刊を読む

ゆく河の流れは絶えずして

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかた(水の上に浮ぶあわ、泡沫)は、かつ(一方では)消えかつ結びて、久しくとゞまりたるためしなし。世中^{よのなか}にある人と栖^{すみか}と、又かくのごとし。たましきの(玉を敷いたように美しい、りっぱな)都^{みやこ}のうちに、棟^{むね}を並べ、甍^{いらが}(屋根の瓦)を争へる(その棟瓦の高さを競っている)、高き卑^{いや}しき人のすまひは、世々を経て尽きせぬ物なれど、是^{これ}をまことかと尋ねれば、昔^{むか}しありし家はまれなり。或^{あるい}は去年^{こぞ}焼けて、今年^{ことし}作れり。或^{おほいへほろ}は大家滅びて小家^{こいへ}となる。住む人も是^{ところ}に同じ。所^{いにしへ}もかはらず、人も多かれど、古^{いにしへ}見し人は、二三十人が中に、わづかに一人二人^{ひとりふたり}なり。朝^{あした}に死に、夕^{ゆうべ}に生るゝならひ、たゞ水の泡^{あは}にぞ似たりける。不知^{しらず}、生れ死ぬる人、いつかたより来りて、いつかたへか去る。又不知^{かり}、仮^{やど}の宿り(ほんの一時の宿のような現世の住居)、誰^たが為^{ため}にか心を悩まし、何^なによりてか目を喜ばしむる。その主^{あるじ}とすみかと、無常^{あさま}を争ふさま、いはば朝顔^{あさがお}の露^{あらい}に異ならず。或^{あるい}は露落ちて花残れり。残るといへども、朝日^{あさひ}に枯れぬ。或は花しほみて露なほ消えず。消えずといへども、夕^ふを待つ事なし。

P.9 ~ 10

[コメント]

この「方丈記」をはじめ、日本の古典は全部読んでも非常に短い。方丈記は岩波文庫で31頁だ。市古先生の本文下の脚注や補注もとても詳しく、高校で古文を学んだ人なら誰でも一人でも十分読める。おまけに、鎌倉時代の原写本の面影を察知するための参考として底本のコピーと、その忠実な読み方まで示してある。サービス満点の「方丈記」。

- 2010年7月21日 林 明夫記 -